英雄と女王の子～Re-make～

剣の舞姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
英雄と女王の子～Ｒｅ－ｍａｋｅ～

【Ｎコード】
Ｎ４１６１Ｙ

【作者名】
剣の舞姫

【あらすじ】
英雄と女王の子のリメイクです。前より少しずつですが内容が変化したり、オリジナルストーリーがあったり、オリキャラが増えてたりと、面白さ倍増！・・・だと良いな。
ファンの皆様、大変お待たせしました！　新たなアリスの物語をお楽しみください。

プロローグ（前書き）

リメイクのプロローグ完成です。

プロローグ

英雄と女王の子
～Ｒｅ－ｍａｋｅ～

＞ｉ３０５６８－２２９６＜

プロローグ

亡国となりしウェスペルタティア王国の元女王、アリカ・アナルキア・エンテオフュシアがメガロメセンブリア元老院に処刑されてから一年、旧世界の日本は京都、そこに建てられた紅き翼の隠れ家でありリーダーであるナギ・スプリングフィールドの別荘に産声が響き渡った。

「ナギはん、産まれたえ」
「あ、ほ、ホントか・・・？」
「やったなナギ！　これでお前も父親だ」

先ほど産声が聞こえてきた部屋の前、そこでウロウロしていた大戦の英雄ナギは、分娩室を兼ねた部屋から出てきた女性、近衛木乃美の言葉に一瞬呆然とし、続いて彼女の夫であり戦友でもあり、親友でもある青山・・・近衛詠春の言葉で我に返った。

「は、入っても、良いか？」
「はい、ほんならウチと詠春はんはラカンはん達んとこに行ってますんで、何かあったら呼んでおくれやす」

二人が立ち去るよりも早く、ナギは部屋に入る。すると、そこにはベッドの上で横になり、先ほど産まれてきた我が子を腕に抱く妻・・・アリカの姿があった。

「ナギ・・・見よ、妾と主の子じゃ」
「お、おう！」

ギクシャクしながらベッドに近づいたナギは、アリカの腕に抱かれる我が子を覗き込む。今は寝ている小さな命は、確かに自分と、愛する妻の子である証が見て取れた。

「髪の色は妾と主の色が混ざっておるが、眉は妾と同じじゃな」
「目元なんか俺ソックリじゃねぇか！　うわっ、マジで俺、親父になったんだなぁ」
「そうじゃ、だから・・・抱いてみよ」
「お、俺がか？　よ、よし！」

ゆっくりと、アリカから受け取った我が子を抱き上げる。まだまだ小さいのに、何故か両腕にずっしりと重みを感じ、確かな温もりが腕に伝わってくるのは、そこに命がある証だ。

「へへ・・・俺の子供か」
「うむ、息子じゃ・・・きっと将来は主に似て強い男（おのこ）に育つじゃろう」
「いや、お前に似て堅物になるかもな」

両親のどちらに似るのか、どんな人間に育つのか、それが本当に楽しみになって、ナギもアリカも、息子の寝顔を覗き込む。
スヤスヤと、父の腕の中で両親に見守られながら眠る小さな命が、そのあどけない愛らしい寝顔が、何よりも可愛く、愛おしかった。

「名前、如何する？　男だし、ネギってのはどうだ？　ネギ・スプリングフィールド」
「ふむ、それでも良いが・・・。ナギよ、この子の名、妾に付けさせてくれぬか？　ネギという名はもしも次ぎに息子を生む機会があれば、その時に付けようぞ」
「ん？　そうか、別に構わねぇぜ」

ならばと、アリカはずっと考えていた名前を、口にする。自分と、そして今はラカン達と共に近衛本家で待っている妹の名が込められた名を。

「アリス、アリス・スプリングフィールドじゃ。この子の名はアリスにしよう」
「アリス？　おいおい、それって女の名前じゃねぇか」
「本来なら、そうなんじゃがな・・・妾と、アスナの名から、付けてやりたい。そう思うて付けたのじゃが・・・」

アリス、アリカから“アリ”、アスナから“ス”、その二つを足してアリスという名にした。本来なら女の名であり、男の子に付ける名ではないのだが、どうしても、これ以上の名が思いつかったのだ。

「そっか、アリカと、姫子ちゃんからか・・・なら決定だな！　今日からコイツは、ナギ・スプリングフィールドとアリカ・アナルキア・エンテオフュシアの息子、アリス・スプリングフィールドだ！！」

こうして、父からは膨大な魔力を受け継ぎ、母からは容姿と名を受け継いだ赤子、アリス・スプリングフィールドは、両親と、その

仲間達に祝福されながらこの世に生を受けた。
英雄である父が残した名声と負の遺産、その二つだけでなく、母が受けた冤罪すらも背負う事になるであろう我が子を、そんな未来が待ち受けている事を知りながらも、今この時だけは、精一杯の愛情を注ぐ。きっとアリスに、幸せな未来が訪れる事を祈って。

アリスがこの世に生を受けて5年、5歳になったアリスは父であるナギから魔法を、ナギの仲間だったラカンからは気を使った格闘を、同じく仲間だった詠春からは神鳴流を、アルビレオからは重力魔法、ガトウからは無音拳や咸卦法を習っていた。
最も、アリスには無音拳の基礎は出来ても咸卦法には才能が無かったのか魔力と気の合一は出来ず、精々同時運用くらいしか出来なかったので、基本的に魔法、格闘、剣、この三つをメインにした戦いをする魔法剣士として教育を受けている。

「アリス」
「あ、かあさん」

アリスがいつもの様に修行をしていた時だった。普段はあまり外に出てこないアリカが出てきて、詠春から貰った練習用の野太刀で素振りをしているアリスに歩み寄ってきたのだ。

「どうしたの？」
「うむ、主ももう5歳、そろそろ本格的に魔法発動体が欲しいじゃろうと思うてな・・・今日はそなたの誕生日でもあるから、これをプレゼントしよう」
「え・・・？　これって“姫”？」
「うむ」

アリカが手渡してきたのは一本の剣、アリカが故郷から唯一持ち出せた剣であり、ウェスペルタティア王国の王家に代々伝わってきた宝剣、黄昏の剣“姫”だ。
黄昏色の刀身と、飾りの一切無い無駄を排した柄と鍔、一見すると宝剣には見えないが、代々の王が受け継いできた剣なので、間違いなく歴史的価値のある代物であるのは間違いない。

「“姫”は発動体としても優秀な剣じゃからな、アリスに誕生日プレゼントじゃ」
「いいの？」
「うむ」
「わぁっ！！」

アリカから“姫”を受け取って大はしゃぎするアリス、そんな我が子を優しい眼差しで見つめるアリカの横に、いつの間にかナギが立っていた。

「良いのか？」
「何がじゃ？」
「“姫”をアリスにやっても」
「・・・あの子には、この先の人生で必ず必要になるじゃろうからな」
「そっか・・・んじゃあ俺の杖はアリスには邪魔かな」

本当ならナギの杖もアリスにプレゼントしようと思っていたのだが、“姫”がアリスに受け継がれた以上、杖の方は次に生まれた子にでも譲る事にした。

「それより、そっちはどうじゃった？」
「ああ、見つけたぜ。もう少ししたら俺達も出発しねぇとな」

「そうか・・・アリスは、如何する？」
「今のあいつじゃ実戦は無理だ。俺の故郷にでも預けとくさ」

これから、愛する息子と暫しの別れとなる。それを思うと少し寂しくなるが、息子の未来の為に、行かねばならない。

「あ、とうさん！！」
「おう！　アリス～！　元気にしてたか？」
「うん！！」

抱きついてきたアリスの頭を撫でると、満面の笑みが返ってきたので、ナギも同じように満面の笑みを浮かべる。
仲睦まじい父と息子の姿、母であるアリカも笑みを浮かべながら、愛する夫と息子の姿を、目に焼き付けるのであった。

プロローグ（後書き）

お待たせしました！　リメイク版投稿開始です！！

第一話　「最初の別れ」（前書き）

まだ幼児編です。

第一話　「最初の別れ」

英雄と女王の子
～Ｒｅ－ｍａｋｅ～

第一話
「最初の別れ」

「それじゃあアリス、良い子にしてろよ？」
「スタン殿に迷惑を掛けるでないぞ？　アリス」
「とうさん・・・かあさん・・・」

イギリスはウェールズにあるナギの生まれ育った村、その郊外に近い所に立つナギの家には村でナギが最も世話になった老人、スタン老に手を繋がれ、不安そうな視線を両親に向けるアリスと、そんなアリスに優しい笑みを向けているナギとアリカ、そして二人を厳しい視線で睨むスタン老の姿があった。

「全く、貴様という男は息子の世話すら出来んのか！」
「そう言うなよじーさん、俺だってアリスの世話はしてぇけどよ。今回はマジでヤベェ相手だから連れて行けねぇんだっての」
「スタン殿には迷惑を掛ける」
「ふん」

スタンとて解っている。ナギの、英雄が残した負の遺産も、まだ大戦が完全には終わっていない事も。だからこそ、言っているのだ・・・、二人がアリスを残してこの世を去る事が無い様に、迷惑を掛けたと思うなら、謝りに来て、確りとアリスを向えに来い、と・・・。

「お、そうだアリス」
「？」
「お前に誕生日プレゼントをまだやってなかったからな・・・ほら」

そう言ってナギが懐から出したのは真新しい手帳だった。
受け取ったアリスが目を輝かせて中を開いてみると、そこにはびっしりと文字が書かれている。それも唯の文字ではない、ナギのアンチョコに書かれている魔法の呪文が全て書かれていたのだ。

「俺達が居ない間はそれ使って魔法の修行してろ。俺が使える魔法や、お前に適正のある魔法をいくつか見繕って書いといたからよ」

ナギに使えなくて、アリスに適正のある魔法、それはナギとアリスの属性の違いにあった。ナギの属性は雷と風、若干だが光を得意としていて、アリスは雷と炎、闇の三つに適正がある。
だからナギは手帳にナギの使える魔法全てと、炎系、闇系の魔法を全て書き込んでアリスにプレゼントしたのだ。

「んじゃ、行って来るぜアリス」
「帰ったら、三人で遊びに行こうぞ。遊園地、行きたいと言っておったからの」
「うん、やくそく・・・」
「おう！」
「約束じゃ」

帰ってきたら、目一杯アリスを甘えさせよう、遊園地にだろうと旅行にだろうと、いくらでも連れてってあげよう。だから今は、ナギとアリカは親ではなく、英雄と女王として、ウェールズの村を出る。

アリスは去って行った両親の背中をいつまでも見送り続け、見えなくなった後も数分は玄関前に立ち続け、ようやく家の中に入るのだった。

アリスがウェールズに預けられて2年が経った。一向に帰ってこないナギとアリカをよそに、アリスは既に7歳になっており、時々様子見に来てくれる詠春から神鳴流を教わりつつ、魔法もスタンやメルディアナ魔法学園で校長をやっている祖父の教えを受けながら技術を磨いていた。

そして、その日も何時もの様に魔法と神鳴流の鍛錬をしていたアリスの下に、スタンが大急ぎで走ってきたのだ。

「はぁ、はぁ・・・ゴホッ！」

「スタンさん？」

「あ、アリス・・・アリカ様が、帰ってきた」

「母さんが！？」

何故、母だけなのか、気にはなるが、とりあえずアリスは戦いの歌で身体強化を施すとスタンを抱え上げて瞬動に入った。

そして、スタンに案内されながら辿り着いたのはスタンの家、中に入るとベッドの上にはボロボロの姿で眠るアリカの姿が。

「か、母さん・・・」

「先ほどの事だった。アリカ様が村の入り口にフラフラと現れたと報告を受けたので、急いで向ってみれば、見ての通りじゃ」

ボロボロの姿で、体力なども消耗し切っていた状態、スタンが駆け寄ると直ぐに意識を失ったらしい。

「父さんは、一緒じゃなかったの？」
「うむ、近くには居なかった。念のため村の者に周辺を探させたが、まだ見つかったという報告は無い」
「そっか・・・」
「うむ・・・アリス、アリカ様が目を覚ましたら呼びに行くから、お前は修行の続きでもしておれ」
「良いの？」
「構わんよって、お主の修行の邪魔をするのは忍びないからのぅ。ナギの馬鹿とは違って勤勉じゃしな」

確かにアリスが此処に居ても仕方が無い。アリカが目を覚ますまで傍に居たいが、スタンの妻がこれから治療や着替えをさせるとの事なので、邪魔になっては本末転倒でもある。
アリスは“姫”を持って外に出ると、何があっても良い様にスタンの家の庭で鍛錬の続きをする事にした。

「アリスおにいちゃん！」
「っと・・・ネカネちゃん」

早速素振りでもと思っていた矢先、後ろからアリスを呼ぶ声が聞こえた。
振り返ってみれば金髪の髪の少女が一人、アリスの従兄妹で、同い年なのだがアリスの方が誕生日が早いので妹分となったネカネ・スプリングフィールドが心配そうな視線を向けている。

「アリカ小母様、帰ってきたの？」
「ん、そうみたい。今は疲れて寝てるけど」
「そう・・・ナギ小父様は？」
「一緒じゃなかったみたいだけど・・・」

だが、何となくだが予想は出来る。母が父を残して帰ってくるなど有り得ない。勿論、父の身に何かがあったのだとは思うが、あの父が簡単に負けるような事、有り得ないのだ。

「母さんが目を覚ましたら、聞かないと」

「そう・・・」

それから暫く、アリスが“姫”の素振りをして、ネカネがそれを眺めていたのだが、漸くアリカが目を覚ましたとスタンが呼んだので、大慌ててアリスは家の中に入る。

ベッドの上ではまだ起き上がるだけの力が無いのか、横たわったままのアリカが目を開け、入ってきたアリスを見た途端に涙を流し始めた。

「か、母さん・・・？」

「アリス……大きく、なったの。今は、7歳か？」

「う、うん」

「そう、か…2年ぶりじゃな」

「そうだね、でも会えて嬉しいよ」

手を差し伸べてきた母、その手をアリスは握り締めると、アリカの僅かに残っていた力がアリスの小さな手を握り締めた。

「ねぇ、母さん・・・父さんは？」

「っ！　・・・・・・ナギは」

そこで言いよどみ、アリカはスタンとネカネに視線を向ける。すると、スタンはその意を汲み取ったのかネカネを連れて外に出て、アリスとアリカ、二人だけが残された。

「アリス、よく聴くのじゃぞ・・・ナギは、死んだ」
「・・・え？」
「いや、死んだ、と言うには語弊があるか……正確には死んだ事になる、じゃな」
「如何いう事？」
「……そう、じゃな。まだ7歳の主に聞かせるには酷かもしれぬが、話すべきか」

そうして語られたのは嘗て魔法世界で起きた戦争の事、戦争の主犯であった「完全なる世界」の事、そして……魔法世界の秘密と始まりの魔法使いの事。

「造物主、奴は戦争の最後でフィリウス・ゼクトの身体を乗っ取った。故に妾たちはその行方を捜しておったのじゃが、2年前に行方が判明してな」

だから幼いアリスをウェールズに残し、アリカとナギはアルビレオとガトウ、ラカン、アスナと共に旅に出て、途中で麻帆良学園を卒業したタカミチと合流、そして・・・。

「ナギは戦いの末、造物主に身体を乗っ取られてしまったのじゃ……故に、妾はナギの意識が残っている内に、王家の魔法を用いて、氷の内に封印した」

その後、ナギと造物主を何とか切り離す方法を探そうとナギを封印した氷と共に魔法世界へ渡ろうとしたのだが、邪魔が入ったのだ。

「奴らめ……よほど妾を処刑し損ねた事が気に喰わないらしい」
「もしかして、メガロメセンブリア？」
「うむ……奴らはナギが封印された氷を奪い、造物主との戦いで消

耗していた妾たちはバラバラになってしまった。ジャックは恐らく魔法世界で何とか逃げ切れたじゃろうが、ヴァンデンバーグとアスナ、タカミチ、アルビレオの行方が判っておらん」

そして、メガロメセンブリアに奪われたナギが封印された氷の行方も、不明のままで、アリカもメガロメセンブリア兵からの追撃を命かながら逃げ切って此処まで来たのだ。

「アリス……主は、如何する？　この話を聞いて」
「僕は…父さんを助けたい」
「妾に、協力してくれるか？」
「勿論だよ母さん、だって親子だもん。僕は父さんと母さんの子供だから、きっと力になれる！」
「そうか…ありがとう」

こうして、アリスはアリカに協力してナギ救出に手を貸す事になったのだが、翌日の検査でアリカが妊娠している事が判明した為、1年以上は動けなくなってしまう。
その間に、アリスはアリカに魔法の師事をしてもらい、自身の切り札となる力を得た。アリスの内に眠る力、それをアリカが発見した為、アリカ師事の下、鍛え上げる事になったのだ。

そして数ヵ月後、アリカは男の子を産んだ。名は以前にナギが男の子に付けたいと言っていたネギと命名され、暫くは親子三人で暮らしていく……筈だった。

「見つけたぞ、災厄の魔女め！！」

メガロメセンブリア元老院直属の兵士が、アリスとアリカ、ネギの暮らす家に、アリスが留守の間に押し寄せてきたのが始まり。

後のメガロメセンブリア最大の危機を迎える最たる原因が、此処から始まる。

第一話　「最初の別れ」（後書き）

次回、アリス旅に出る。以上です！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4161y/

英雄と女王の子〜Re-make〜

2011年11月15日23時42分発行